

(様式1)

平成30年度試験研究課題設定のための要試験研究問題提案・回答書

(整理番号) 084	提案機関名 畜産技術センター
要望問題名 不耕起対応トウモロコシ播種機の適応性拡大(家畜排せつ物の同時期施肥技術)	
要望問題の内容 【 背景、内容、対象地域及び規模(面積、数量等) 】 平成28年度までで貴所で開発した「不耕起対応トウモロコシ播種機の適応性拡大」技術は神奈川県 <small>の</small> 飼料増産利用拡大において革新的かつ経済的な技術である。一方、生産現場において継続的かつ安定して家畜排せつ物の処理を行うことも営農の継続性において必要である。そこで不耕起播種技術に併せ環境面も十分対応しつつ家畜排せつ物の散布が播種に併せ同時期に行われるよう技術開発をお願いする。	
解決希望年限	①1年以内 <input checked="" type="checkbox"/> ②2～3年以内 ③4～5年以内 ④5～10年以内
対応を希望する研究機関名	①農業技術センター <input checked="" type="checkbox"/> ②畜産技術センター ③水産技術センター ④自然環境保全センター
備考	

※ ここから下の欄は、回答者が記入してください。

回答機関名	畜産技術センター	担当部所	企画指導部企画研究課
対応区分	①実施 ②実施中 ③継続検討 ④実施済 ⑤調査指導対応 <input checked="" type="checkbox"/> ⑥現地対応 ⑦実施不可		
試験研究課題名 (①、②、④の場合)			
対応の内容等 飼料用トウモロコシの不耕起栽培では、前作物収穫後、堆肥の散布、化学肥料を施用してから、不耕起播種機で播種します。不耕起栽培では、堆肥の施用後に耕起をしないため、堆肥は圃場に表面散布されたままの状態となります。他県では、堆肥を施用することにより、粘土質の土壌では覆土不足が改善され、苗立率や収量が向上するなどの効果や生ふんの施用により発芽不良が発生したなどの事例が報告されています。 一方、本県では、圃場周辺の環境によっては、堆肥を表面散布したままにすることにより、臭気の問題が発生することが考えられます。臭気問題の発生を防ぐためには、臭気の少ない堆肥を散布することが必要です。一般的には、臭気の少ない堆肥を製造するためには適正な初期調整、切り返しや攪拌、堆肥化発酵期間の確保などが必要です。 なお、堆肥を表面散布することにより臭気が心配される場合には、堆肥散布、化学肥料施用後にディスクハロー等で簡易耕起してから不耕起播種機を用いた簡易耕播種技術を利用することにより、臭気の発生を低減しながら省力化を図ることができます。			
解決予定年限	①1年以内 ②2～3年以内 ③4～5年以内 ④5～10年以内		
備考 飼料用とうもろこしの作付け拡大に向けた新しい栽培技術(2015 畜産草地研究所)			